

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過します。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

第13回 広島が消えた(後編)

木村 美子^{きむら よしこ}さん 昭和16年生まれ

(前編は7月15日号に掲載)

昭和20年8月6日午前8時15分、私は爆心地から2キロメートルの場所で被爆しました。3歳の時のことでした。私たちは、命からがら広島東照宮に避難しました。

学童疎開の引率で広島を離れていた父は、私たちの無事確かめるために必死に探し回り、やっとのことで私たちが生きていると知ったそうです。

兄弟を原子爆弾(原爆)で失った父は、残された兄の嫁と一緒に暮らすことになりました。やがて父と兄嫁は結婚し、大規模農家だった実家は生き残った父が跡取りとなりました。当時としては珍しいことではありませんでした。それからしばらく、父とは会うことはありませんでしたが、父は原爆の放射能に汚染された土壌などに触れたことによる二次被爆で、亡くなるまで苦しんだそうです。父の葬式の時、兄嫁が泣いてわびていた姿が今でも目に焼き付いています。

今もなお心と体をむしばむ戦争の傷

7歳になった私と母、4歳の妹は、これ以上ないほどの貧しい生活を余儀なくされました。母は、原爆の熱風や放射線などによる「原爆症」を患い働けない状態でした。そのため幼い私が家族を守るしかありませんでした。何よりも困ったのは食べ物です。米などはもちろん食べられません。栄養不足と不衛生な環境のせいで疫病が流行し、ノミやシ



中学生に被爆した経験を語る木村さん

ラムが湧くと殺虫剤をかけられたり、腹の虫を追い出すために薬を飲まされたり、思い出したくないことはたくさんあります。

被爆の影響は何年経っても体に現れます。私は67歳の時、末期の大腸がんで大手術を受けました。目には、84歳になった今も爆風が原因と思われる症状が出続けています。母は頭の手術を何度も受けましたが、73歳で亡くなりました。10歳年下の叔父も二次被爆に苦しみ、晩年には体がだるいなどの症状が続く「原爆ぶらぶら病」を発症しました。叔父の子どもや孫にも重い原爆症の症状が出ています。私も子どもや孫の体に影響がないかと、今でも心配でたまりません。

平和への願いと共に未来へ

50歳の時、勤めていた会社の社員旅行でたまたま北マリアナ諸島のテニアン島を訪れました。そこは、原爆を積んだ米軍の爆撃機B29が広島と長崎に向かって飛び立った場所です。「なぜ自分がこの地に來たのだろう」と驚きと共に運命のようなものを感じました。

現在、私は戦争で経験したことを語り伝える活動をしています。時代がどれだけ変わっても、「広島」「長崎」の空で原爆がさく裂したという事実は変えられません。これからも「平和の尊さ」「健康のありがたさ」「助け合うことの大切さ」を伝え続けていきます。

市では、市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和7年8月15日号 No.1537



成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは(株)デンソーウェブの登録商標です

*本紙は8月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

保育園の時から仲良くしている友人が飲食店をオープン。一人でける店がやっと私にもできました。肉厚なモツ焼きやおいしいお酒などが味わえるこの店。サイドメニューのキムチが絶品でした。□に入れた時は甘く、その後にピリッと来る強めの辛みがたまりません。すりおろしたリンゴで甘みと辛みのバランスを取っているそう。注文したことの無いメニューも期待してしまいます。暑い日が続きますが、冬季メニューの鍋物が楽しみです。

リサイクル適性[®]
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。